

実践型インターンシップにおける

教員と学生サポーターの効果的な役割分担の考察

～徳島大学「実践型インターンシップ（地域型）」の取り組みを手がかりに～

川崎修良¹⁾ 西田大連²⁾ 煙上裕貴³⁾

1) 徳島大学人と地域共創センター, 2) 徳島大学生物資源産業学部, 3) 徳島大学総合科学部

1. はじめに

徳島大学では COC+R 事業の一環で、半年間の期間を設けて地域課題に学生が挑むプロジェクト型の自治体インターンシップ(以下「地域型 IS」)を実施している。PBL の実施に当たって学生に高い意欲を持たせるには、プロジェクトの達成を我が事と考える当事者をチームに組み込むことが重要である。地域型 IS では、地域おこし協力隊等の地域社会での活動者をパートナーとすることでこの課題の解消を図っている。具体的には、隊員等の挑戦したい活動が自治体の課題解決と直結する場合に、協力隊と学生がチームを組み協働で取り組むプロジェクトを立ち上げる。これにより、学生が地域ニーズを踏まえた地域課題解決の実践に挑む機会を実現させてきた。

地域型 IS のもう一つの特徴として、希望する修了生がサポーターとして次年度以降もプログラムに関わり、地域で得られたつながりの引き継ぎや、プロジェクト学習を行うにあたっての実践上の課題に対してアドバイスを行う体制が作られている。学生が授業の履修生として地域に関わる期間は半年間だが、その後も続くこうした学生同士の縦のつながりによって、プロジェクトの学習効果についても学生自らが議論し、プログラムの学びを更新していく状況が生まれている。

プログラム修了生が運営に加わり、自身が履修者であった経験を基に履修生のつまづきや悩みを解消するサポートを考えるなど、教育面において教員との役割分担を進めていくことは、こうしたプロジェクト型の地域連携を大学教育に定着

させるための要諦であると考えられる。そこで本発表ではサポーターとして運営に参加している修了生(以下「サポーター」)への聞き取りと、著者のうちの2名が実際にサポーターとして参与して得られた知見から、履修生及びサポーターとしてのどのような経験から必要なサポートを導き出したかを確認し、地域型 IS の運営に修了生を包摂する上での効果的な役割分担と、分担を促すための教員の役割を考察する。

2. 地域型 IS の構成と履修生の動き

地域型 IS は大きく分けて、①プロジェクト企画、②チームビルド、③調査フェーズ、④中間報告会、⑤実践フェーズ、⑥最終報告会、の6つの局面で構成されている。以下各局面の履修生の動きを概説する。

①プロジェクト企画(4月～5月)

担当教員による活動。パートナーの候補者と自治体職員を交えた事前打ち合わせを実施し、プロジェクトの目的、目標、背景となる課題、地域の状況などを整理する。

②チームビルド(6月～7月)

説明会に参加し、パートナーとの面談による相互選考を通して参加プロジェクトを決定する。

③調査フェーズ(8月～10月)

実際に地域を訪問し、現地の課題の確認や関係者へのヒアリング等を行いながら、当事者意識を高め、具体的な活動計画を作成する。

④中間報告会(10月下旬)

プロジェクトの課題と目標を再整理し、自分たちの言葉でエンゲージメントを宣言する。

⑤実践フェーズ (11月~1月)

活動計画と中間報告での宣言を基に、現地で課題解決の進展に向けた実践を行う。

⑥最終報告会 (1月下旬)

期間中に自分たちが実施した取り組み(アウトプット)と、それによって地域がどのように変化したか(アウトカム)の視点で成果報告を行う。

以上、6つの局面(履修生がチームとして参加するのは③~⑥の4局面)を通して、履修生は明確な到達目標を持って限られた期限で成果を出すことが求められる「プロジェクト」の一連を経験する。また、授業期間外とはなるが、希望するチームには最終報告会後の2月~3月(場合によってはそれ以降)においても、未達となってしまう活動や追加で取り組みたい活動のバックアップを教員が行い、地域との関わりを継続させることを試みている。

3. 構築されたサポーターの役割

地域型ISは2022年度に開始し、今年度で4年目の実施となるが、2年目から修了生がサポーターとして運営に参加し、サポーターが加わっての活動は既に3年目となる。各年の活動を通してサポーター学生は、自分たちの関わる意義、履修生の学びをより高めるサポート等について議論を重ね、サポーターの役割を自らで作り上げてきた。今年度の段階でサポーターが自認している役割を以下に報告する。なお、本稿(発表抄録)作成の段階では一部学生のみ聞き取りとなるため、本発表において補足を行う。

①プロジェクト企画 (4月~5月)

プロジェクト企画において主たる役割を果たすのは教員であるが、特に過去年度に実施する地域でプロジェクトに臨んだことのあるサポーターが現年度のチームにバトンを渡す形で、到達目標の設定に意見を出す場合がある。彼らは当該地域ですでに現地の方とネットワークを形成しているため、個別プロジェクトのサポーター役としても主要な役割を果たしている。

②チームビルド (6月~7月)

プログラムの経験者として各プロジェクトの

説明の場に加わり、取り組みの中での苦労ややりがい履修希望生に伝えることで、メンバーのミスマッチを防ぐ役割を担っている。

③調査フェーズ (8月~10月)

自身らがプロジェクトのスタート時に何から手をつけるか戸惑い停滞した経験から、履修生が地域で取り組むショートプロジェクト(1泊2日の合宿形式)を企画し、地域と関係を形成するための足掛かりをチームで考える機会を作っている。また、各プロジェクトに1名以上のサポーターが伴走し、パートナーとの関係や進行に問題が生じた時、教員も含めた運営メンバーで共有する役割を担っている。

④中間報告会 (10月下旬)

チームワークにおいて生じがちなトラブルを解消するための相談の場とワークショップの企画運営を実施している。

⑤実践フェーズ (11月~1月)

引き続きプロジェクトに伴走し、チームがプロジェクトを完遂するまでに障害・障壁が生じた際に運営メンバーに共有している。

⑥最終報告会 (1月下旬)

プロジェクトを通して履修生が得た学びを振り返るワークショップを企画運営している。

4. おわりに

以上、地域型ISを継続する中で、サポーターが自身らが関わる意義を議論し、作り上げてきた役割を整理した。プログラムを継続する中で、教員は複数のプロジェクト全体の進行と後方支援、サポーターは個々のプロジェクトの伴走といった役割分担が生まれてきている。サポーターはこうした活動を行う動機として、「自分たちの学びを現役生に還元でき、また自分たちもプロジェクトの運営を円滑に進めるためのスキルを習得・習熟する機会になる」という考えがあることが、サポーターへの聞き取りから確認できている。本発表ではさらに個々の役割をサポーターが自認するまでの過程を確認し、また教員側の課題として上記サポーターの動機に応えるためのマネジメントの視点での取り組みを合わせて報告する。